

上林曉全集
一

筑摩書房

上林曉全集 一

昭和四十一年一月十日發行

著 者 上 林 曉

發行者 古 田 晁

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京〇七六五一（代表）

振替東京四一二三

印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

上林曉全集第一卷目次

澁柿を囁る少年	三
又は、飯を盗む少年	
夕暮の會話	一二
桑畑	二
律太郎の前史	四九
水天宮附近	六四
夜の自轉車	七一
雪の日の一團	九二
花莫塵	一〇五
敗れて敗れた男	一二三
オートバイの選手	一四〇
淺草のジョン・フォートランド氏	一四五

海鳥の糞	一五七
アパートの葬式	一七一
第二會場	一八二
鴨のいたづら	一八四
京極と春子の關係	一九〇
手風琴は古びた	二〇〇
春燈	二二八
蒐集	二三三
擲日記	二三六
黒ん坊の首	二四三
望樓の上の女	二四八
アルキビアデスの犬	二六一

北極星發見	二六五
青空	二七三
星を撒いた街	二八一
パン屋の驢馬車	二九七
鐵橋の別れ	三〇五
風はユーカーリ樹に	三一四
馬を去勢する日	三三一
薔薇盜人	三三六
花園に向いた部屋	三四九
赤襦衣の屋臺	三五九
沿岸船	三七四
牧羊場	三九〇

在りし日……………三九五

銅鑼……………四〇四

天草土産……………四〇九

團欒……………四三一

書 誌……………四三九

小說

一

澁柿を囓る少年

又は、飯を盗む少年

一

「右之者到底成業の見込無之候に付退學被致候間此の段及御届候也」

中學校の受持教師から二度目の呼び出しの手紙が來た日、父は高樹の面前で、直ぐさま墨を摺つて、かういふ退學届をしたためた。

それを見詰めてゐると高樹は胸がつまつて來た。父の動かす筆先を追うてゐた眼がぼうとかすんで、涙がむづ痒く湧き出て來た。一年半の間に飽き果ててしまつた學校だつたが、もう行けなくなるのだと考へると未練が残つた。一緒に怠けてゐた連中は大きな顔して相變らず學校へ行つてゐるのに、自分だけたつた一人除け者にされる。實に情ない話だ。けれども、もう諦めるよりほか仕方がなかつた。受持教師からはあまり度同じ小言を繰り返されて來たので、たとへ平手で殴られても、懲りたと思ふことが出来なくなつてゐた。保證人をしてゐる町の親戚の主人が、何度校長から呼び出されて、高樹への訓戒を言ひつけられたことか。保證人で埒があかなくなつて、たうとう最初の呼び出しの手紙が父宛に届いた。父は學校からの呼び出しに

應じなかつた。子供の受持教師の前に頭を下げるのは自尊心を傷けるし、いい恥さらしだと思つた。その代り父は、有り合はせた革帶^{バインダー}をつかんで、高樹の顔から首筋にかけて殴りつけた。それほどまで折檻されても、高樹のずばらは矢つ張りつづいた。高樹にしてみれば、——流石の高樹にも、もう一度許してくれと歎願する勇氣が起らないのであつた。

「そりや、學校へ持つて行け！」

父は書き了へた届を、つつけんどんに高樹に渡した。高樹は涙の溢れた眼を横に拭つて、父から渡された退學届をふところへ振ち込み、父の言ひつけ通り自轉車に乗つて、中學校のある町へ出掛けて行つた。

父は縁端に坐つたまま、高樹の後を見送つた。胸の中は煮えくり返る思ひであつた。軒に吊した百舌鳥が、時々小賢しい眼で主人の方を盗み見た。それすら癪にさはるやうな氣持だつた。

父が高樹を廢學させようと思ひ立つたのは、夏休みのはじめであつた。學校から成績通知簿が届いたとき、ぞつぷりと冷水を浴せかけられたやうだつたと、父は後になつて母に言つてゐた。實際、高樹の成績は、代數と圖畫だけが甲で、あとはみな丙丁戊だつた。語學は全部戊であつた。父はその時、高樹の前途に對して暗澹たる思ひがした。こんな劣等生を學校へやるのは恥さらしだ、いつそ廢めさせてしまへと思つた。高樹の不品行については、これまで噂にも聞き、目撃もした。けれども、こんなに平氣で不成績を取つて居ようとは思はなかつた。

或る日、父が用事で町へ行く途中、學校へ行つたはずの高樹が、山蔭の芋畠の中で鞆を枕に晝寝してゐるのを見かけた。父は黙つて、自轉車の上から見過して行つたが、實になんとも言へぬ氣持であつた。又、或る朝、鶏が一羽居なくなつてゐた。高樹が盗み出して、どこかで惡友連中と飲み騒いだのにちがひなかつた。今思ふと、こんな事實の一つ一つが、丙丁戊の成績にかつきりと當てはまるやうだつた。

結局、もう一學期だけ高樹の成り行きを監視することにして、父はまだ最後の斷案は下さなかつた。しかし新學期になつても、高樹の行狀は少しも改まらなかつた。九月半ばに、最初の呼び出しが來た。つづいて、今度の二度目の呼び出しとなつた。父はうむも言はず、一枚の退學届を突きつけて、自分自身の自尊心を維持しようとするのであつた。

父は暫く縁側にぼんやりしてゐたが、急に氣を紛らさうとするかのやうに、朝讀んだ新聞を引き寄せて、もう一遍讀みはじめた。

その間に、高樹は町とは正反對の隣村の郵便局へ行つて、退學届をポストの中へ投げ込んだ。そして、同じ意け仲間の家へ寄つて、一時間ばかり無駄話してかへつて來た。父はまだ空疎な眼を新聞の上に晒してゐた。

高樹がかへつて來たのを見ると、父はむつつりした聲で訊いた。

「先生に渡して來たか？」

「授業最中で、事務室の書記さんに渡して來た。」

高樹の聲も重かつた。空々しさは微塵もなかつた。

父は突然新聞をはつたらかして、百舌鳥の籠を提げて出て行つた。今度は高樹がぼんやり縁側に坐つて、父の後姿を見送つた。

二

その晩、父と高樹とは机の前に向ひ合つて坐つてゐた。酒氣を帶びた父の顔と、古疵の痕の残つた高樹の

眉間とが、薄暗い電燈の下でてかてか光つてゐた。窓の外の蜜柑の植込みには月の光が白くこつてゐた。

父は机の抽斗を矢鱈に掻きまはす。高樹は父の手許を不安さうに見詰める。抽斗の中からは女の寫眞が出た。懷中鏡、短刀、褄口、さくら紙などが、赤い圈點をつけた戀愛小説の抜き書きと一緒に、二つの抽斗いっぱいだ。祕密な品物が掘り出される度に、高樹は羞恥と不安に喘いだ。

最後に、銀の腕時計が出た。

「これはどうして買ったぞ。まさか盗んだんぢやあるまい？」

父は膝をにじり寄せた。

高樹は俯向いた。

「おい、誰の金で買ったぞ、言へ！」

高樹はいよいよ俯向く。音を立てて涙が疊の上に落ちた。

「顔上げんか。」

高樹は荒々しい父の指先を、額に強く感じた。と同時に、不覺にも、首がいやと言ふほど仰のいた。涙が頬を傳うた。

「よう。誰に貰うて買ったぞ。……言へないぢやろ。」

父は高樹の下唇をぐいと捻つた。

「痛い！」

高樹は父の手を振りほどいて、邪慳に言つた。だが、一聲叫んだきりで、あとは牡蠣のやうに口を緘んだ。痛けりや、言へ！」

途端、父のごつごつした平手が、高樹のこめかみの上に降つた。高樹は横倒れに倒れた。そして狂暴な悲

鳴がつづいた。

「明日からうちへ戻るな、出て行け！」

父は立ち上りざま、高樹を蹴つた。

「出て行け！」

父の憤怒の前に、帽子が飛んだ。鞆が、制服が飛んだ。本箱の中の教科書と筆記帳とが雪崩れを打って落ちた。

「そんなに虐待して馬鹿になるが！」

母が飛び込んで来た。悲しみをこめて、而も決然として、高樹をかばふ聲だつた。

「はじめつから馬鹿ぢやもの、今更馬鹿になつてたまるかッ。……馬鹿がッ。」

父の眼は結膜炎のやうに赤かつた。さうは言つたものの、父も鼻つ端を挫かれた恰好だつた。すると、親子三人の間に沈黙が割り込んで来た。母は袂の端で恠しく涙を拭ふ。高樹は顔を両手の中に埋めて啜り上げる。涙と涎といつしよになつたものがたらたらと疊の上に落ちた。

「今晚は家に寝させんぞ。」

最後に父の一言が高樹の胸にぎくりと響いたとき、彼は深淵に落ちてゆくやうな淋しい思ひがした。

三

高樹は伯母の家で一夜を明かした。その翌る日から、彼は伯父や伯母の家で時折り飯を食はせて貰つては隣近所の餓鬼大將をつとめた。子供等を唆かせては、間食の糧をふところ一杯持つて來させ、それをもらつ

て食つては空腹を満たすこともあつた。小學校がひけてから夕飯までの間は、金比羅様の森を中心に劍闘劇を演じて暮らした。夜になると、村の青年達にまじつて娘の家で遊んで、馬鹿話をした。小遣ひのあつた時のやうに「しきしま」は吸へなかつたけれど、相變らず縁なしの伊達眼鏡をかけてゐた。夜更けてから青年達の定宿へ轉げ込むと、その儘午近くまで大酺をつゞけてゐた。仕事はなし、飯を食ふあてはなし、出来るだけ睡眠を食つた。

其の間に、高樹はたつた一度手紙を認めて出した。同じ中學校のなまけ仲間で、兄弟のやうに親しくしてゐた友達宛てだつた。

「僕はたうとう學校をやめた。父がおこつて、今は家を追ひ出されてゐる。伯父などは、馬を買うて貰うて百姓をやれといふが、僕は百姓は大嫌ひだ。もちつと氣のきいたことがしたい。來年の春はどこか都會の中學校を受けて見たい。若しかしたら、九州に居る兄を頼つて行くかも知れない。僕は高等小學校の二年の時、女の子が川で溺れかけてゐるのを助けたことがあつた。あの時分はみんなからほめられたが、近頃の評判の悪いことはお話しにならぬ。」

その中に君の所へも遊びに行くよ。八幡様のお祭ももう近付いたねえ、一つ飲まして貰ひに行くかも知れないぞ。おやぢに云うてうんと看を拵らへておけ。F子に會うたらよろしく。良兄も、安兄も、常兄もみんな相變らず發展しよることだらう。僕も遊びに行き度くてたまらぬ。では失敬。」

かうして高樹は父の家とは殆んど關係を絶つて暮した。伯父などが、頻りに父との間を取り計つてゐたが、それはそれに任せて自分は屈托のない日を健かに送つた。

時々、家人の居ないすきを見すまして、彼は野良猫のやうに家へ歸ることがあつた。そんな時には、きま

つて家の裏手の屋根を訪れた。そこには三百目といふ大きな澁柿が眞つ赤に熟れて垂れ下つてゐた。彼はこの澁柿によつて食欲を補つた。その柿は手に餘るほど大きいのだけれど、澁柿だから、蕊に近い甘い所だけを多ぐり取つて食ふよりほか仕方がなかつた。前日來むき残した種や皮は腐りかけて、甘酸つばい臭ひが、瓦の上一杯に瀾漫してゐた。高樹はそこに陣取つて、人知れず澁柿の味を楽しんだ。

屋根の上からは青々とうねつてゐる十月の海が見渡された。長く突き出た岬の山膚もあざやかである。松原に續く刈田の中では時々銃聲が聞えた。それは白い煙の立つのが見えてから聞えて來た。すると犬が輕快に駆け出すのだつた。父の飼つてゐる百舌鳥が、上の山の松の木の天つ邊にゐる野の百舌鳥と相應じて鳴き立てた。

高樹には家を追ひ出されてゐるといふ感傷は少しも起らなかつた。無心に秋の陽を浴びて、澁柿に咽喉をごくごく鳴らして、野原を見渡して居ればよかつた。

四

數日後、高樹はたうとう家に忍び込んで飯を盗んだ。それは、食欲を満たすと同時に、少年らしい冒險心アドベンチャーの満足だつた。

彼は裏山傳ひに茶の間の格子の外に立つた。土間は眞つ暗でがらんとしてゐた。僅に、格子からさし込む西陽の光の縞が、土間から座敷にかけて屈折を描いてゐた。

彼はそりつと土間の戸を開けた。明るみから急に這入つて來たので、視力を回復するのに暫くかかつた。飯櫃の中には冷い飯がボロボロしてゐた。